

巻 頭 言

技術ブランドの向上を目指して

阪神高速道路株式会社 執行役員 中林 正司

阪神高速道路会社の技術の粋を凝縮した技報第24号が刊行されたことは誠に喜ばしい限りであります。技報の創刊は1981年（昭和57年）ですから、実に27年間の長きに亘り築き上げてきた技術の伝統が今年度もしっかりと継承された証であります。創刊号以来、私たちはその時代に要請された道路建設や道路管理の技術成果を技報に収め、「技術の阪神高速ブランド」を育ててきました。

阪神高速道路公団が設立されたのが1962年（昭和37年）。大阪万国博を目指して急ピッチで建設が進められた阪神高速道路でしたが、その後の環境問題の顕在化により建設に急ブレーキがかかり、これを打開するための大胆な技術革新が求められました。従来の思考回路を遮断しなければ成果が生まれぬ艱難辛苦を経験して、一步ずつではありましたが新しい環境対策技術が種々考案され、「技術の阪神高速」が芽生え始めました。

当時の日本は「日本列島改造論」が華々しく展開されていた時代であり、当地大阪では関西都市圏の将来を託した大阪湾岸開発が動き始め、その基幹軸を担う湾岸線の建設が始まった頃です。港大橋に始まる湾岸線の建設では「日本で初めて」「世界で初めて」の新技术が次々に阪神高速から発信され、世界中の技術者の目が阪神高速湾岸線に注がれました。

技報が産声をあげたのがこの時代でした。時代の変遷とともに移りゆく阪神高速の高度な技術を世界に発信し、その足跡をしっかりと後世に残すのが技報発刊の目的でした。計画、設計、施工、維持管理の各分野で次々に研究開発される新技术を収録した技報は発刊を重ねるにつれ充実し、「技術の阪神高速ブランド」が花開き始めたのです。

そんな技術王国を鼓舞していた私たちが一瞬にして奈落のどん底に落とされたのが、忘れようとして忘れられない阪神淡路大震災です。倒壊、落橋等の甚大な被害を受けた3号神戸線が28kmに亘って不通を余儀無くさせられた出来事は、13年を経た今も皆さんの脳裏に生々しく残っているに違いありません。しかしながら、私たちはこの3号神戸線を僅か18ヶ月で完全復旧させました。驚異的なスピードで復興を成し遂げた根底には、私たち技術者に根付いた挑戦への不屈の闘志と蓄積された技術力にあったことは誰も異を唱えることはないでしょう。ここに再び「技術の阪神高速ブランド」が蘇ったと確信するものであります。

そして2005年（平成17年）10月、私たちは「先進の道路サービスへ」を企業理念に掲げて民間企業として再スタートを切りました。安全・安心・快適をお客様にお届けする事をモットーに新たな視点での技術開発に向けて再スタートを切ったのです。

「先進の道路サービスへ」。民営化3年目の今、技術者各位がこれまで培った技術力に一層の磨きを掛け、揺るぎのない「技術の阪神高速ブランド」をこの技報とともに育てられることを切に願うものであります。